

熊野古道なかへち美術館 開館 10 周年記念特別展 「野長瀬晩花展」

会期 前期：10月10日(金)～11月3日(月・祝)
後期：11月15日(土)～12月7日(日)



《初夏の流》 1918(大正7)年

京都市美術館蔵

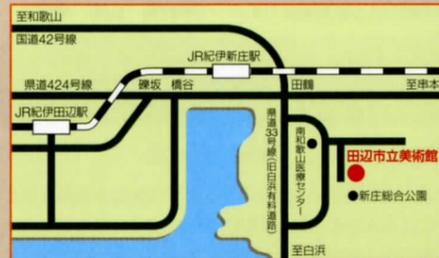
1918(大正7)年秋、東京日本橋の展覧会場「白木屋」では第一回国画創作協会展(通称国展)が開催され、新しい日本画を目指す画家たちの大作20点が、人々の話題を呼びました。この中に、野長瀬晩花の六曲一隻屏風《初夏の流》が出品されました。岩絵の具を駆使しての大胆な色彩と構図、西洋風な発想の日本画、誰の目にも強烈に飛び込んでくる異様な印象。賛否両論を呼ぶ、第一回国展にふさわしい若さみなぎる作品の登場でした。晩花にとってはこの《初夏の流》が東京でのデビュー作であり、実質的な日本画壇へのお披露目となりました。

晩花が日本画家として輝かしい活躍を見せた時代は、大正5年前後の数年間をピークとした、明治の終りから大正末期にかけての10年あまり。一生を通して表舞台で活動した画家ではありませんでしたが、画壇に残した足跡にはみすごせないものがあります。(学芸員 山本 泰代)

美術館あれこれ⑧ 展覧会の種類その2「特別展」

美術館が持つコレクションを系統的に紹介する「常設展」に対して、特定のテーマに基づいて企画、開催される展覧会を「特別展」と呼びます。「特別展」には色々な形がありますが、主なものとしては美術館が独自で企画・開催する自主企画展、一つの企画展を複数の会場で開催する巡回展があり、巡回展にも各美術館などの担当者が共同で企画を立案して各会場を巡回させる共同巡回展と企画会社が提案した企画を複数の会場で巡回させる展覧会とがあります。海外展や国宝級の作品が多く出品されるような大がかりな展覧会の場合は、開催費用もかなりの額になるため単一の館で企画・開催することが困難となります。そのため複数の館が同じテーマの展覧会を共同で開催することによって、各館の費用や労力の分担をはかることができるのが巡回展の大きな利点となっています。財政や人員が小規模な館であっても、この方法であれば比較的大規模な展覧会が開催できるため、最近では公立美術館であってもこのような共同巡回展で展覧会を開催する館が多く見られます。(学芸員 辰巳 充)

利用案内



田辺市立美術館

■開館時間
午前10時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
JR紀伊田辺駅から明光バス
「新庄病院前」下車、徒歩5分。

〒646-0015
和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770
FAX.0739-24-3771



田辺市立美術館分館 熊野古道なかへち美術館

■開館時間
午前10時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
JR紀伊田辺駅から龍神バス
「なかへち美術館」下車。

〒646-1402
和歌山県田辺市中辺路町近露892
TEL.0739-65-0390
FAX.0739-65-0393

表紙作品紹介 野長瀬晩花《女人図屏風》 1916(大正5)年頃 田辺市立美術館蔵

1918(大正7)年に「国画創作協会」を創立して、日本画の表現を刷新する作品を発表した5人の画家、小野竹喬、榊原紫峰、土田麦僊、野長瀬晩花、村上華岳は皆1909(明治42)年に開校した京都絵画専門学校の第一期生である。それぞれ順調に頭角を現し、文部省美術展覧会(文展)でも受賞するなど、注目される新進の画家となったが、晩花だけは学校を中退し、早くから反官展の態度を表明して同人展、個展を中心に活動していた。《女人図屏風》にうかがえるような晩花独特の型破りな表現と情感の表出が好感をもたれ、新しい芸術への情熱が同期の画家たちと共有されたのであろう。文展の審査に反発する在野の新しい団体「国画創作協会」結成の運動に晩花も合流する。「国画創作協会」の活動が始まってからも晩花の個性は特に際立っていた。

(学芸員 三谷 渉)

編集後記

今年は梅雨明けが昨年よりも早く、猛暑が長く続きましたが、私は食欲旺盛でこの夏を乗りきることが出来ました。今年の当館の夏は、博物館実習の大学生や10年経験者地域社会体験研修の小学校教諭の受入れ、ワークショップ、秋からの特別展の準備等々、様々な行事が重なりスタッフは慌しく過ごしました。

今秋、分館は平成10年の開館から10周年の節目を迎え、記念特別展として野長瀬晩花展を本館と合同で開催します。芸術の秋にふさわしい作品を展示して、館員一同、皆様のご来館をお待ちしています。(本館 Y.M.)

田辺市立美術館NEWS ORANGE Vol.9

発行年月日：平成20年10月1日
編集・発行：田辺市立美術館
熊野古道なかへち美術館

ORANGE

田辺市立美術館NEWS
Vol.9



野長瀬晩花《女人図屏風》 1916(大正5)年頃

田辺市立美術館蔵

野長瀬晩花

～熊野の土から生まれた異色の画家～

大正期の京都画壇に新風をおこした国画創作協会創立メンバーのひとり、野長瀬晩花の生家が今も田辺市中辺路町近露道中に残っています(写真1)。

1889(明治22)年、野長瀬弘男(のちの晩花)は、熊野詣の主要街道である中辺路で生まれました。熊野九十九王子の中のひとつ近露王子の前の通りは道中と呼ばれ、古くから宿場町として栄えたところでした。多くの旅籠がならぶ中で、弘男の父も「かめや」と呼ばれた宿屋を営み、弘男が生まれた当時は近露郵便局の初代局長を務めていました。父親はまた材木の売買などでたびたび都会に出かけており、田舎に暮らしながらも、新しい文化に対しては理解があった人でした。弘男はこのような環境の中でのびのびと育ちました。

学芸に関しては母の影響であると後に晩花は語っていますが、幼少より天然痘や骨膜炎を患い、足の病気が原因で小学校は通常より3年遅れて卒業したことから、父は絵の好きだった息子を画家にしようと決めたといいます。弘男は父の方針に従い、14歳で大阪に出て、絵を学ぶために中川蘆月の門に入りました。夏や冬の休みになると帰郷して、スケッチなどをしたようです。

現在では国道311号線を車で快適にドライブして熊野を行き来することができますが、当時の人々にとっては箸折峠(写真2)を越えて都会へと出かけ、帰郷の際にも懐かしい近露の風景を目にしながらかの峠を下ってくるというのが通常のコースでした。当地に電気が来たのは大変遅く、1949(昭和24)年のこと。霧も深くなる近露の景色を箸折峠から眺めると桃源郷のようだったと古い

時代を知る人々は口を揃えて言います。晩花の若い時代の作品《近露全景》(写真3)は、この箸折峠付近からみた近露の風景ですが、中央やや左下には晩花の生家がはっきりと描かれています。幼い時代から繰り返し眺めたこの風景は、晩花にとっても大切なものだったのでしょう。(学芸員 山本 泰代)



写真1: 野長瀬晩花の生家あと (2008年筆者撮影)



写真2: 箸折峠付近から見た晩花の故郷、近露(2008年筆者撮影)



写真3: 《近露全景》 1909(明治42)年頃 個人蔵

INFORMATION

熊野古道なかへち美術館 開館10周年記念特別展 「野長瀬晩花展」

会場 / 熊野古道なかへち美術館・田辺市立美術館
 会期 / 前期:平成20年10月10日(金)～11月3日(月・祝)
 後期:平成20年11月15日(土)～12月7日(日)
 開館時間 / 午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
 休館日 / 毎週月曜日(但し10月13日、11月3日、11月24日は開館)
 ※11月4日(火)～11月14日(金)は展示替えのため休館します。
 観覧料 / 熊野古道なかへち美術館
 一般 210円 (160円)
 大学・高校生 150円 (120円)
 中学生・小学生 100円 (70円)
 田辺市立美術館
 一般 600円 (480円)
 大学・高校生 400円 (320円)
 中学生・小学生 200円 (140円)

()内は20名以上の団体料金です。
 土曜日は中学生・小学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料です。

◎記念講演会を開催します。
 11月15日(土)午後2時より 田辺市立美術館研修室
 「日本画を超えた日本画家・野長瀬晩花」
 島田康寛(美術評論家・立命館大学文学部教授)
 (観覧料のみ必要。手話通訳もつきます。)

展覧会紹介

田辺市立美術館

★特別展:真砂幽泉展

前期:平成21年1月10日(土)～2月11日(水・祝)
 後期:平成21年2月21日(土)～3月22日(日)

江戸時代中期から後期にかけて、田辺領三栖組の大庄屋に生まれ狩野派の画家として藩の御画師御用人支配をつとめた真砂幽泉の特別展を開催します。当時、狩野派の画法が紀南という地でどのように展開されていたかを彼の画業から窺がおうというものです。和歌山県立博物館や近隣町村、寺社などが所蔵する作品を中心に真砂幽泉の全体像を関連資料とともに紹介します。(学芸員 辰巳 充)



真砂幽泉《七福神図》 和歌山県立博物館蔵

熊野古道なかへち美術館

★館蔵品展:雑賀清子展

平成21年2月14日(土)～3月22日(日)

ノボドウ、ミツバツツジ、モチノキ、ヤイトバナ、タンキリマメ、ヤマアジサイ、ユキノシタ…。雑賀清子が数十年に亘ってスケッチしてきた植物の大部分は、私たちの身近なところにあるものばかりですが、その瑞々しさにははっとさせられるでしょう。殆ど目にもとめなくなったような小さな植物の確かな息遣い。雑賀はそれらを作品として発表することではなく、自分と同様に生きていくものへの共感として記録に留めてきました。自然をみて雑賀のスケッチを鑑賞する。スケッチを見たあと熊野を散策する。草花で熊野をたどっていただく小さな展覧会です。(学芸員 山本 泰代)



雑賀清子《ゆきのした》 熊野古道なかへち美術館蔵

REPORT 【国際博物館の日】記念講演会

【日時】4月26日(土) 14:00～ 【場所】田辺市立美術館 研修室

博物館の役割の社会へのアピールをねらいとする「国際博物館の日」は国際博物館会議(ICOM)によって1977(昭和52)年に設けられました。日本でもICOM日本委員会の事務局をおく日本博物館協会(当館も加盟しています)が中心になって2002(平成14)年からこの事業への取り組みがなされています。毎年5月18日の「国際博物館の日」前後ひと月ほどの間に全国の博物館(美術館は美術に特化した博物館といえます)で様々な催しが開かれます。

当館では開催中の特別展「智恵子抄～光太郎・智恵子と佐藤春夫～」にあわせて鳥取大学教授で書家の住川英明さんにお越しただいて講演会を開催しました。当館から「国際博物館の日」と今年のテーマ「社会の変化・発展に寄与する博物館」について説明をした後、住川さんに「最後の芸術―高村光太郎と書」と題して、光太郎が晩年精力的に取り組んだ書作品の分析、解説をしていただきました。

彫刻や詩に比べ、光太郎の書についての研究はまだ蓄積が浅いように思われます。光太郎の書作品研究の第一人者である住川さんの講演はたいへん貴重なもので、特別展の内容もいっそう充実したものとなりました。

(学芸員 三谷 渉)



高村光太郎《有機無機帖》の図版を使いながら解説する住川鳥取大学教授

REPORT 谷内庸生展 ―ワークショップ「カミ・かみ・カミ」熊野から―

【日時】7月20日(日) 13:30～ 【場所】熊野古道なかへち美術館 交流スペース

7月20日(日)、『谷内庸生展―紙彫刻の世界「紙と」』にあわせて作家の谷内庸生さんを講師に迎え、ワークショップを行いました。会場になった交流スペースには、参加者から見学組まで30名あまりが集合。谷内さんは、紙を丸めたり切ったりしながら、紙は力持ちで石でものせることができる形があることや、ゴムのように飛ばすこともできる、切り方で向こうの光もすかしてみえるなど、作品を作るためのヒントになる切り方と、気持ちをどう表現するかなど、次々と紹介。お話しにあわせて参加者は大小さまざまな作品を作りました。最後は自分の顔より大きな自画像を全員が制作しワークショップは終了。小学校一年生から大人まで、カミ・かみ・カミにうずもれての楽しい2時間はあっという間でした。(学芸員 山本 泰代)



谷内さんの指導で紙を切る「あ!むこうの光がすけてみえた!」

REPORT 博物館実習・地域社会体験研修

美術館では実習や研修の受入れも行っています。本年度はこれまでに、学芸員の資格を得るための勉強をしている大学生3名の博物館実習(5日)と採用から10年を経た小学校教員1名の地域社会体験研修(1日)の申込みがあり、ともに8月に実施しました。

実習、研修そのものはごく短期間ですが、実習生についてはそれまでの大学での学習、単位取得の積重ねがあり、研修についても目的と内容についての協議を重ねて実施しています。

当館もこうした実習、研修は美術館の活動、役割についてのより深い理解が浸透する良い機会でもありと考えていますので、付け焼刃の内容にはならないよう心して取り組んでいます。(学芸員 三谷 渉)



展示作業の実習を学芸員の指導のもと行う大学生